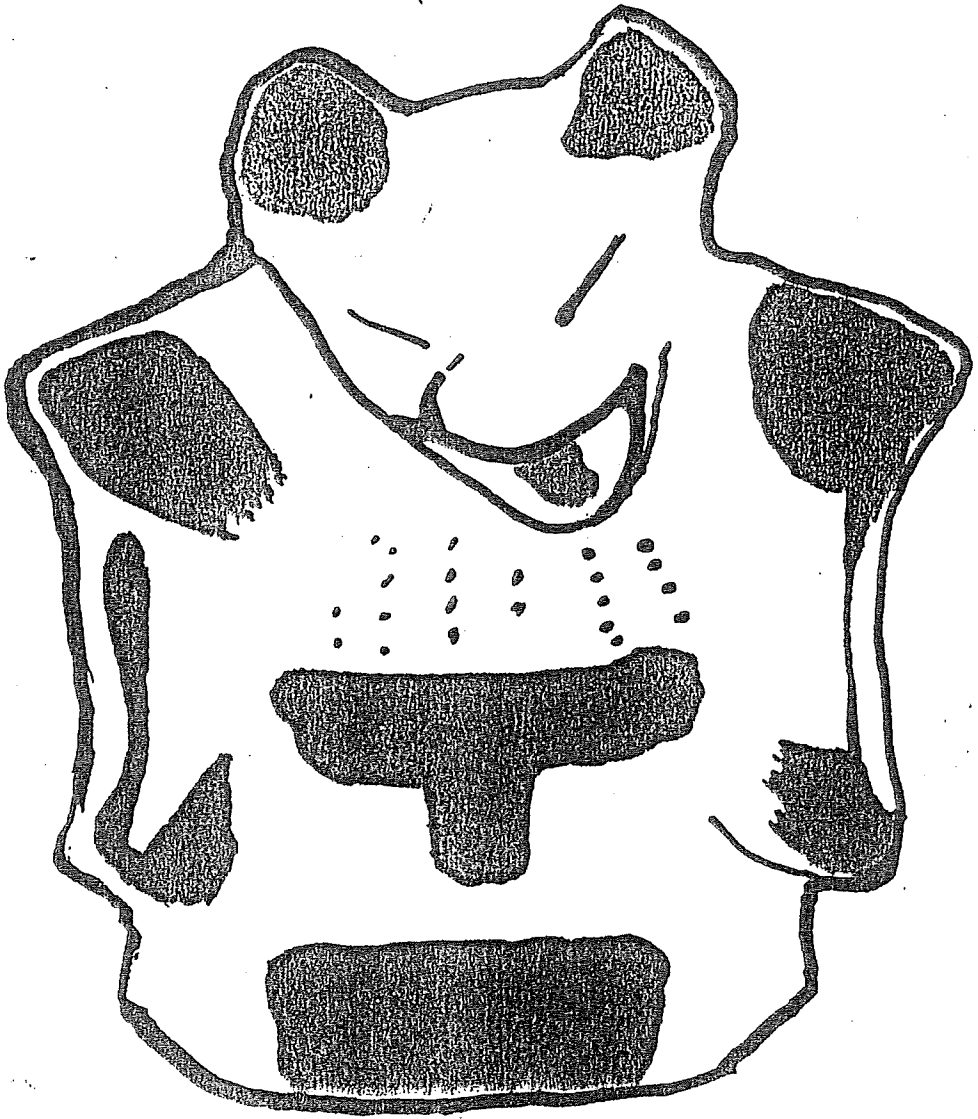
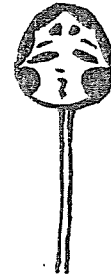


おとんとほ。





廃絶への道



松本節太郎（下総玩具作者）

私は生れてこのかた一定した職というものがなく、いったい何が本職であったかは、私自身よくわからなかった。放浪四十年。戦後やと千葉県の柏に流れつき、これという定業がないためやむをえず、かつて放浪中ある玩具工場の雑役中習得したものを生かして、この食糧事情の悪い時代をなんとかして生きねばと、附近の山の粘土を利用し、子供達に向きそうな、子守、だるま、動物、首人形などを作り、千葉県下を売り歩いた。しかし、

これも限度があり、せめて東京方面のさかり場へ行けば、少しは売れるようになると思つた。そこで、特に神社仏閣の行事とか、祭礼、縁日向きの際物的に工夫した。

今まで子供相手に売っていた長い串の首人形を切りつめて小麦わらに刺し、熊手に似たような形式で柱掛にし、さしあたり十二支、七福神、ひねり等を、とにかく際物らしく体裁よく作り上げた。暮から正月にかけて人の

集まる、酉の市、歳の市をはじめとし、明治神宮、浅草観音、亀戸天神、柴又帝釈天、西新井大師、虎門金比羅、水天宮、各地の不動、諸々に点在する閻魔堂、稻荷めぐりは申すに及ばず、東京を中心にして、千葉、埼玉、神奈川、茨城等、近県をとび歩いた。そして、行事とか縁日以外は、銀座、浅草、上野、新宿を、常時めぐり歩いた。

売れそうなものを次から次へと工夫し、天神祭に天神玩具、三月のひな時は土びな、稲荷の狐面、庚申に猿面、大師の行事はだるま、花見時は土製の小鉢を焼いて造花を仕入れて客におしつけ、寅年に首振りの虎、辰年は首振りの辰、四季を通じていろいろと工夫し、売れそうな玩具を作った。今ではどうにもならないほど種類が多くなってしまった。ああ、そうそう、河童ブームの時には河童に追いかけられた。

時は昭和二十三年頃であった。上野広小路

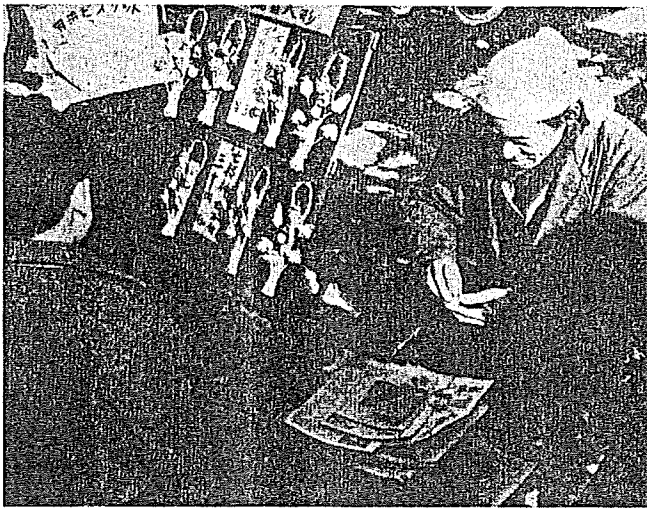
の路傍に、新聞紙をしいて首人形を売っていた。たまたま竹とんぼの会員という人が、よく買いにきた。その後、ある日店を出したばかりのところへ、とつぜん、竹とんぼの会場へ来るようにと、使いの人が来た。何が何だかよくわからなかったが、とにかく荷をまとめ、検束されることにした。戦前、社会運動に少々首をつっこんでいた時、よく警察へ検束されたことがあり、その思いがまだ抜けきれない時分で、人に連行されることを検束だと思っていた。銀座の路傍で玩具を売っていた時も、道路法とかなんとかでよく連行された。しかし、今日の連行は、何となく前途に明るいものがあるように思われた。

とどこころ戦禍の跡の残っている街を、どこをどう歩いたかよくわからないが、たぶん四谷辺と思われたその会場では、今思うに牧野、安藤、山田、鈴木、佐藤、清水諸氏十五、六人位の会合があったらしく、その時何をきかれ、何を話したか今は忘れたが、なにしろ玩具の荷が軽くなり、明日の配給の米が買えそうだと思ひ、嬉しかった。そしてこの日は、私にとって竹とんぼとの最初の出会いであり、長くごめいわくをかける最初の日でもあった。

昭和二十九年、新宿の伊勢丹で日本郷土玩具即売会があるから出品してはと、竹とんぼ

から話があった。ちょっと不安ではあったが、とにかく少々出すことにした。いったいこの、その場かぎりの、露店の際物が、郷土玩具展の末席をけがすことになろうとは、かつて思ったこともなかった。

先に路傍で売っていた際、たまたまお客に住所をきかれたことがあり、これにはちょっと困って、下総中山の奥のほうということにしておいた。戦災で焼け出され、柏の山の中にこしらえた雨露をしのぐだけの山小屋であ



▶路傍で売る筆者。七福神が三十円の頃。

り、紙の屋根、荒壁、荒むしろの床、すき間だらけの雨戸。ランプがあれど石油のない夜は、星や月がよく見える。この住いを、あまり人に知られたくなかった。その時のことを思い出し、下総という国名をお借りして、さしあたり仮に「下総首人形」とした。

街から街へ、放浪の露店は長いあいだ続いた。たまたま物産館の坂本氏のご指名もあり、全日本郷土玩具即売展の会場の実演に、何回か出るようになった。ある日、ある会のある会員から、牛乘天神の特別注文がきた。その時私は、一個人だけでなく多くの人々に楽しんでいただくために、私の工夫したものの以外は作らない由をお伝えした。その返事に、際物師が実演で芸術家気取り云々と、お叱りを受けた。正に思いあたる節があり、否定し得なかった。私は露店でも会場でも玩具を直接渡し、皆様が喜んで下さるその楽しさは同じと考えたのがまちがいであった。私の玩具の性質からして、やはり露店の際物売りが本来の姿であった。そのことがあってからは、いかなる実演もやめることにした。そして芸術家とか民芸家とかいうことが自然に解消されると思った。いつのまにか郷土玩具になっちゃった、とつぜん降ってわいた、伝統のない下総玩具の、短い歴史であった。

昭和三十三年一月に竹とんぼの末席の会員

となって十五年。竹とんぼの諸先生の諸説を拝見し、最近やっと郷土玩具の何ものかを知ることができた。そして、下総と名をつけた玩具は、どこか何か欠けていることを知った。しかし私は、郷土玩具というより際物としての製作を、有名になろうとなるまいとそんなことには関係なく勝手気ままに続けることを、残された人生の夢としている。

郷土玩具は膠にかの芸術である。それは名玩を指して特にいえると思った。その名玩を生み出したよき時代があった。たとえば伏見の玩具で、各地にその類型が散在しているとしても、それに何等こだわることもなく、花ざかりであった。このよき時代の膠の芸術品が、今では蒐集家の所蔵品の中以外では、おそろく見ることができなくなりつつある。

現在は偽作、盗作ということは玩具研究家の前では許されない時代であると同時に、膠を使用せずともよい新材料が豊富にある便利な時代でもある。毎年正月、日本橋の某百貨店に全国の玩具が一堂に集まる。私は膠の臭いをかきまわる。しかし、近代的な新材料にわかり、膠は年々少しずつ姿を消していくことは、時代の流れでこれもやむを得ないと思う。私は現在、名玩にあやかるために膠を使っているわけではなく、今のところ経済的であるという理由だけである。

最近民芸ブームとかいっても、何しろ一つ一つ手作りのため、多くの人々の求めに応じられない。あまりにも時代おくれの生産方法は現在の天文学的數字の經濟についていけず、遅かれ早かれ廢絶への道をたどらねばならない。かりに後継者があるといっても、おそらくこの苦盃をも継がねばならぬ宿命にあるように思われる。

ただ、生きる道は、近代的な設備と新材料をいかにして使用するにかかっているように思われる。

下総玩具といっても、それほど惜しむ歴史があるわけではなく、この時代の流れに抗し得ぬ時がやがて来ることを考えておかねばと、このごろはしみじみと感じる。

そして膠の火が消える時は、廢絶の日である。

△追記▽

紺屋職人の子と生まれ、幼くして父と共に放浪し、路傍の石を一つ一つひろいあげるようにして文字をおぼえたが、文法とかいうむずかしいものはいっこうにわからない。生まれてはじめて原稿用紙のますの中に文字をはめこんだが、こんなことをするのは最初であり、おそらく最後と思われる。文章はとにかく、生産者のなやみをお伝えしたかった。

筆者住所 千葉県柏市八幡町三一三六

玩人慢訪余聞

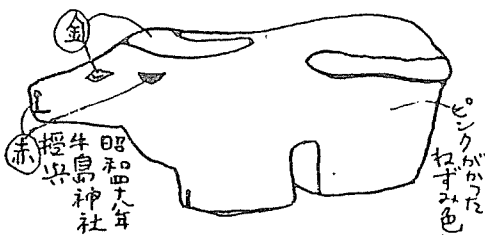
—初詣隅田川七福神の巻—

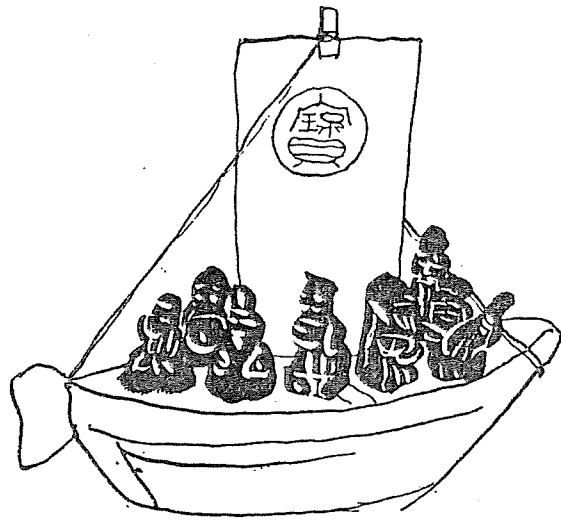
赤坂吾笑亭

昭和十六年発行「鯛車」二月号の記事、

「一月二日東京支部有志にて巡拝、参加者川口貫一郎、山田猷、稲垣武雄、小沢一蛙、佐藤寿、鈴木祥湖、杉浦藤太郎、牧野玩太郎、松田昇太郎、越前久作、鈴木凡太郎、石井康策」だいが故人になられた方もあるが、このうち今年の初詣に参加したのは牧野、山田の両氏、まことに久しいものである。この後、戦争が始って「竹とんぼ」の活動も一時中断されてしまったが、戦後、復活とともに、例年の初詣も催されるようになり、もう何回ぐらいになるだろうか、雨に災いされたことが一度もなく、毎年よく続いたものである。このごろは行く場所に困ってむしかえしが多くなり、今年の七福神も三、四回目のような気がする。

この日朝のうち雨模様だったので、かさを持って出かけたが、集合場所の浅草松屋前についたころは晴天の見通しもついて一安心。それでもいつもより少なくて十九名程、うちご婦人はたった二、三名といつになく淋しい集りだ。吾妻橋のほうへ歩き出す。正月早々というのに橋の袖の水上バスの発着所の中で殺人事件があつて、パトカーや新聞社の自動車、沢山来ていて異様な風景。橋を渡って左折、枕橋を越えると向島である。護岸工事であつたコンクリートの堤防のため隅田川の水が見えなくなり、その上を高速道路のガードが覆っていて、向島の土手の風情はすっかりなくなつてしまひ、まことに殺風景なありさま。七福神には関係はないが、今年は丑年で十二年目ごとに出る瓦牛のお守りを授与するため牛島神社による。お守りは全部売切れて予約受付中、現品は、旧正月の元旦、今年は二月三日とのこと、この三日という日が今年は元日と節分と初午と三つかさなつたという珍しい日であ





め白髯という名から連想して七福神の仲間入りしたものだそうだ。最後は多聞寺の昆沙門天、遠く綾瀬川の鐘ヶ淵まで歩く。六、七丁はある。その間水神の森や梅若堂木母寺などの史蹟はあるが皆荒れはてて昔をしのぶようがない。ようやく多聞寺へつく。ここは一番古いおもかげを残しているお寺で、茅葺きの山門も狸の伝説で名高い境内の庭もそれらしい趣きがあつて気持を落着ける。綾瀬の駅から東武電車で一気に浅草まで戻る。朝とちがつて観音様のまわりは大変な人出で、さすがに正月らしい混雑だ。解散して大木さんを先頭に五、六人で人ごみをかきわけながら国際

劇場のほうへ行く。大木さんは入院中なのに遊び歩いていたため院長に怒られて他の病院にうつされて、嚴重な禁足を命じられたそう。この日が最後の外出となり、今頃は病院のベッドの中で優雅な暮しをしながら我々とのガサツなつき合いをなつかしんでいることであろう。

玩信玩報 (敬称略)

◎「郷玩サロン会報」一九号 二月号刊

郷土玩具雑話 徳力富吉郎他

◎「ふりつち」三八号 二月発行

特集Ⅱ瀬戸内と中国の郷土玩具 ふりつち

十周年記念特集号 讃岐おもちの会

◎「凧毎日新聞社刊 広井力著 六五〇〇円

◎「日本の凧の会総会」三月十日

日本橋たいめい軒 凧揚げ・製作・収集と

凧に興味をもつ会員二百名募集

◎「東京三月例会」三月八日

「おもち絵」の収集・研究のアン・ヘリ
ング女史(会員)の収集品をスライドにし

て九十分の講演会 出席者六十七名

◎「瀬戸内おもちの集い」四月八日

二十一年に一度の三つ山祭記念 山陽百貨

店 播摩郷土玩具の会

◎第六回郷玩ゼミナール「日本の凧について」四月二十二日 講師・鈴木常雄 静岡雪だるまの会 静岡新聞社別館

Ⅱ竹とんぼバックナンバーⅡ

七〇 七三 七六一八一 八三 八六 八八

八九一九一 九三一九八 各一冊二百円

一〇〇(一九九索引付) Ⅱ一 二一五 各

一冊二百五十円

送料一冊五十円 五冊以上無料

Ⅱ改訂現存郷土玩具絵入番附Ⅱ

昭和四十三年番附発行のもの今回改訂再版
いたしました。(一三頁写真参照)

◎八幡馬(青森)を木牛(新潟)、芝原土人

形(千葉)を目無達磨(群馬)等、作者死

去廃絶、中絶を数ヶ所訂正。

又年賀切手の鶏、犬、猪を加えました。

価 三百五十円(会員に限り二百五十円)

送料一部五十円(郵券二十円可)

計報

稲垣 武雄氏(東京都江東区)三月十二日

日本郷土玩具の会の前身、戦前の愛玩会の
創立の中心人物であり、姉様の収集・研究で
著名でした。行年七十五才。

◆新入会員紹介 (二月〜三月) 敬称略

東京都北区	堀越雅夫
東京都江戸川区	山下卓夫
埼玉県浦和市	小山圭治
宮城県小牛田町	斉藤輝子
三重県桑名市	近藤文雄
京都市上京区	匠美
兵庫県西宮市	湯本美知子
北九州市小倉区	恒任康之

(訂正) 大阪府吹田市 伊丹要二

■編集後記■

★失礼なことばかもしれませんが、新しく入会された方にはほとんど「初心」の方もあります。いくらか先にこの道を研究した人々の指導を受けることは、収集の参考になることが多いと思います。近い友、遠い友、よき玩友を作るのもたのしみです。

「竹とんぼ」は、この号から、企画編集印刷のすべてがかわりました。いっそうの「ご愛読、ご協力をねがいます。」(餓)

★七号より編集印刷担当に会員の八木田宜子さんを加え、杉原氏多忙のためのおとを引受けていただきます。古谷氏の玉稿長い間

お預りしていましたが今回より連載、ご期待下さい。

今年度より年間四冊の計画、ご投稿お待ちしています。(玩)

★今号から編集のお手伝いをする事になりました。先輩にいろいろ教えていただきながら、昭和の二桁世代としてどう郷玩に取組んだらいいのか、考えていきたいと思えます。どうかよろしく。(宣)

●会の運営メンバー(アイウエオ順)

赤坂吾笑亭／安藤舜二／泉孝次／石上學／川野幸三郎／坂本一也／杉原晴人／高橋三郎／袴田穠／松本栄一／牧野玩太郎

発行 昭和四十八年四月一日 第II-7号
会員頒布・非売品

日本郷土玩具の会

発行所 東京都千代田区外神田六丁目

電(八三二)七七三九

振替東京 一六七二〇九

編集者 東京都渋谷区富ヶ谷二丁目

安藤 藤 舜 二

◎当誌の写真、図版及び記事を無断にて転載を禁じます

会報「竹とんぼ」年四回、四、七、〇発行

会費年額 二〇〇〇円

入会歓迎 希望者は発行所へ申込みのこと